

敷島町文化財調査報告 第17集
(山梨県)

山宮地遺跡Ⅲ

敷島中学校内耐震性飲料水兼用貯水槽建設事業に伴う
中世遺跡の発掘調査報告書

2003

敷島町教育委員会

敷島町文化財調査報告 第17集
(山 梨 県)

山 宮 地 遺 跡 III

敷島中学校内耐震性飲料水兼用貯水槽建設事業に伴う
中世遺跡の発掘調査報告書

2003

敷島町教育委員会

序 文

山宮地遺跡は、平成5年度に行われました遺跡詳細分布調査によって新たに発見された遺跡で、その後平成11年度に第1次の発掘調査を実施しております。さらに平成12年度に行いました遺跡分布地図の改編によって、今回の調査地点が包蔵地として新たに指定され、調査に至った次第であります。

本調査の結果、15から16世紀にかけての墓壙が多数発見され、中世数島の歴史に新たなページを加えることができました。さらに、これまで実施した1次、2次の調査を踏まえて、この山宮地遺跡が、中世御嶽信仰に大きく関わった性格の遺跡であることも明らかになりつつあります。これまで付近を通る通称『御嶽道』の存在と、僅かに残る史料をもとに語られてきました中世の歴史が、いま考古学という研究方法によってより具体的な形となって現れ、私たちに語りかけています。

今後、未解明な点が多い中世社会について、本資料が少しでも研究の資としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査ならびに整理調査にあたり、ご協力を賜りました関係各位に対し、衷心よりお礼申し上げますとともに、引き続き数島町文化財保護行政にご理解とご協力を戴きますようお願いをいたしまして序文といたします。

平成15年3月31日

数島町教育委員会

教育長 山口 正 智

例 言

1. 本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町島上条地内に所在する山宮地遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、敷島中学校内耐震性飲料水兼用貯水槽建設に伴って実施した発掘調査で、調査面積約70㎡である。
3. 発掘調査は、平成13年（2001年）12月11日～平成14年1月11日までの約1ヶ月間にわたって行った。整理作業は、平成14年度事業として実施した。
4. 発掘調査にあたった組織は、次のとおりである。

調査主体者	敷島町教育委員会
調査担当者	大高正之（敷島町教育委員会生涯教育課副主査）
調査事務局	敷島町教育委員会生涯教育課
	武井 泉（生涯教育課長 平成13年度）
	長田徳一（生涯教育課長 平成14年度）
	下笹俊彦（生涯教育課社会教育係主幹係長）
	酒井紀子（生涯教育課主事 平成13年度）
	海野元巳（生涯教育課主任 平成14年度）
	小坂隆司（生涯教育課嘱託）
5. 本書の執筆、編集は大高正之が担当した。掲載写真の遺跡全景および遺構と、遺物写真の撮影は大高・小坂が行った。執筆・編集にあたり小坂隆司の協力を得た。
6. 第23号土壌出土赤色物質の科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社委託し、分析を行った。第3章は、その分析報告である。
7. 出土した銅銭、鉄製品は帝京大学山梨文化財研究所に委託し、保存処理を行った。
8. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり、次の方々より御教示をいただいた。ここにご芳名を記し、感謝申し上げます。（順不同、敬称略）
羽中田壯雄、畑 大介（敷島町文化財審議会）、手塚直樹（青山学院大学）、
藤澤良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、山下孝司、関間俊明（韭崎市教育委員会）、
新津 健、野代幸和（県立考古博物館）、佐々木 満（甲府市教育委員会）
9. 発掘調査ならびに整理調査参加者（順不同、敬称略）
飯室久美恵、長田由美子、高浜美智子、保延 勇、森沢篤美、青山制子、石川弘美
10. 本遺跡の出土遺物および調査で得られたすべての記録については、一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡 例

1. 本書の第1図は建設省国土地理院発行の地形図(1:25,000)「甲府市北部」「菲崎」「甲府」「小笠原」の各一部分を用いて作成したものである。
2. 挿図中、土器断面が白抜きは土師器、土師質土器で、黒塗りは須恵器、斑点は陶器、斜線は磁器である。
3. 挿図中、五輪塔に記された黒字は墨書である。
4. 挿図中、●は土器、★は銅銭、■は五輪塔である。
5. 図版中、遺構と遺物は縮尺が統一されていない。

本文目次

序 文	
例言・凡例	
目 次	
第1章 遺跡を取りまく環境	1
1. 遺跡の立地と環境	
2. 周辺遺跡と歴史的環境	
第2章 遺構と遺物	6
1. 住居跡	
2. 土坑	
3. 土墳墓	
4. 遺構外遺物	
5. 銅銭	
6. 五輪塔	
第3章 自然科学分析	38
1. 赤色物質の科学分析	
第4章 まとめ	40

挿 図 目 次

第1図	山宮地遺跡と周辺の遺跡	2	第14図	20～23号土墳墓出土土器	23
第2図	調査区位置図	4	第15図	23～29号	24
第3図	遺構配置図	5	第16図	30号土墳墓・遺構外出土土器・鉄製品	25
第4図	1・2号住居と1号土坑	13	第17図	2～14号土墳墓出土銅銭	29
第5図	1～6号土墳墓	14	第18図	14～24号	30
第6図	7～12号	15	第19図	24～29号	31
第7図	13～18号	16	第20図	29～32号	32
第8図	19～23号	17	第21図	五輪塔1	34
第9図	24～28号	18	第22図	2	35
第10図	29～32号	19	第23図	3	36
第11図	1～6号土墳墓出土土器	20	第24図	4	37
第12図	6～11号	21	第25図	赤色物質のX線解析図	39
第13図	12～19号	22			

表 目 次

第1表	銅銭観察表1	26	第3表	銅銭観察表3	28
第2表	銅銭観察表2	27	第4表	五輪塔観察表	33

写 真 図 版 目 次

図版1-1	調査区と遠景	図版6-2	2号住居跡出土遺物
図版1-2	調査区全景	図版6-3～14	1号～17号土墳墓出土遺物
図版2	1号～8号土墳墓	図版7-1～11	19号～30号土墳墓
図版3	9号～16号土墳墓	図版7-12	土墳墓内出土の釘
図版4	17号～24号土墳墓	図版7-13	遺構外出土遺物
図版5	25号～31・32号土墳墓	図版8	五輪塔
図版6-1	1号住居跡出土遺物		

第1章 遺跡をとりまく環境

1. 遺跡の立地と環境 (第1図)

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源として南流する荒川によって形成された緩やかな南傾斜の扇状地である。敷島町は扇状地の扇頂部分に位置し、荒川を挟んで対岸は甲府市となる。この一帯の西側には、盆地北西部にそびえる茅ヶ岳によって形成された赤坂台地が南北に伸びており、JR中央線付近において終息する。この台地の西側には大河富七川(通称釜無川)が、また東側には小河川貫川が南流する。一方、周辺北側はこの扇状地形の背後を担うように片山が東西に伸び、さらに片山の東端から南側へ舌状に湯村山が張り出す。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、しかも南側の盆地に向かって開口し、まるで天然の要害を形成するかのような特殊な地形を織り成している。

このうち、荒川の右岸に位置する敷島町は、町域南北約17km、東西約4kmと南北に細長い町である。本町はおおよそ北部の山間地帯と南部の扇状地域に大別されるが、町域のほぼ8割は標高1,704mを測る茅ヶ岳や岳岳、太刀岡山などの山間地帯(一部丘陵)からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形上にある。東には荒川、西は貫川が流れ、東西を河川で挟まれた地域となる。この扇状地上には、南北に二つの微高地(自然堤防)が走っており、この微高地上に古代からの生活の営みが連続と続いているのである。

山宮地遺跡はこの町南部の扇状地上の微高地に営まれており、調査地点東側には古道御嶽道、南側には徳坂路が通る交通の要衝地でもある。

2. 周辺遺跡と歴史的背景 (第1図)

近年頻繁に発掘調査が行われている町南部の遺跡について時代ごとに概観していくこととする。代表的な遺跡は9遺跡が上げられる。

縄文時代 町内では現在のところ旧石器時代の遺跡は確認されておらず、人々が生活していた最も古い痕跡は縄文時代からである。これまで11軒の住居跡が発見されている。

代表的な遺跡には、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、金の尾遺跡⑧などが上げられる。

原腰遺跡はこの時期には稀である埋燗炉を有する縄文時代前期末の住居跡が1軒発見されている。

金の尾遺跡では、これまで6回の調査がおこなわれ、1987年の中央高速自動車道建設による第1次調査で住居跡計8軒(前期末1軒、中期7軒)、さらに第4次調査で住居跡1軒と竪穴状遺構1基が確認された。

また、松ノ尾遺跡の第3次調査でも中期中葉にあたる住居跡1軒が確認されているが、もっとも濃密に該期の遺構・遺物が確認できているのは現在のところ金の尾遺跡である。

弥生時代 金の尾遺跡⑧があり、県内外を代表する大変重要な遺跡である。これまでにVI次に渡る調査が行われており弥生時代の住居跡33軒、方形・円形周溝墓24基をはじめ、南北の集落跡を二分すると考えられるV字の溝などが発見されており、県内で最も古い方形周溝墓群を有する弥生時代後期の集落遺跡として著名である。遺物は、中部高地系の土器と東海系統のものがともに出土していることから学術的にも貴重な資料を提供している。

また、第VI次調査では遺跡の外側を巡るとみられる環濠跡も幅3m、長さ55mに渡って確認されている。

古墳時代 これまで7遺跡においてその存在が確認されている。

前期の遺跡は、原腰遺跡②、松ノ尾遺跡⑤、三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などが上げられ、各遺跡ともS字状の台付甕、壺、高坏などが多く出土している。

御岳田遺跡(I次)では落込み内から水晶の原石8点と水晶製丸玉の未製品1点が、末法遺跡(II次)では1号住居跡から緑色凝灰岩質の加工途中の管玉1点と剥片類が出土し、該期の工房跡の存在が予測される。

金の尾遺跡(IV・VI次)でも該期の多くの遺物が出土しており、とくにIV次調査では本町では初めての発見となる前期の周溝墓が2基確認されている。



第1図 山岳地帯と周辺の連続

- 1 山口県庁
- 2 宇布川
- 3 宇布川
- 4 宇布川
- 5 宇布川
- 6 宇布川
- 7 宇布川
- 8 宇布川
- 9 宇布川
- 10 宇布川
- 11 宇布川
- 12 宇布川
- 13 宇布川
- 14 宇布川
- 15 宇布川
- 16 宇布川
- 17 宇布川
- 18 宇布川
- 19 宇布川
- 20 宇布川
- 21 宇布川
- 22 宇布川
- 23 宇布川
- 24 宇布川
- 25 宇布川
- 26 宇布川
- 27 宇布川
- 28 宇布川
- 29 宇布川
- 30 宇布川
- 31 宇布川
- 32 宇布川
- 33 宇布川
- 34 宇布川
- 35 宇布川
- 36 宇布川
- 37 宇布川
- 38 宇布川
- 39 宇布川
- 40 宇布川
- 41 宇布川
- 42 宇布川
- 43 宇布川
- 44 宇布川
- 45 宇布川
- 46 宇布川
- 47 宇布川
- 48 宇布川
- 49 宇布川
- 50 宇布川
- 51 宇布川
- 52 宇布川
- 53 宇布川
- 54 宇布川
- 55 宇布川
- 56 宇布川
- 57 宇布川
- 58 宇布川
- 59 宇布川
- 60 宇布川
- 61 宇布川
- 62 宇布川
- 63 宇布川
- 64 宇布川
- 65 宇布川
- 66 宇布川
- 67 宇布川
- 68 宇布川
- 69 宇布川
- 70 宇布川
- 71 宇布川
- 72 宇布川
- 73 宇布川
- 74 宇布川
- 75 宇布川
- 76 宇布川
- 77 宇布川
- 78 宇布川
- 79 宇布川
- 80 宇布川
- 81 宇布川
- 82 宇布川
- 83 宇布川
- 84 宇布川
- 85 宇布川
- 86 宇布川
- 87 宇布川
- 88 宇布川
- 89 宇布川
- 90 宇布川
- 91 宇布川
- 92 宇布川
- 93 宇布川
- 94 宇布川
- 95 宇布川
- 96 宇布川
- 97 宇布川
- 98 宇布川
- 99 宇布川
- 100 宇布川

中期の遺跡は、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨でそれぞれ住居跡1軒がみられる。

末法遺跡(1次)は1号住居跡から甕、壺、高坏、坏などが出土し、しかも器種とその量が充実している。金の尾遺跡(IV次)1号住居跡や御岳田遺跡(1次)2号住居跡でも甕、甕、坏、高坏が出土している。

後期の甲府盆地北西部では、6世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。代表的なものに荒川左岸の甲府市湯村に位置する万寿森古墳(12)や県内で2番目の石室規模を誇る加牟那塚古墳(13)が存在し、この頃本地域は県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6世紀末～7世紀前半には町の南部を群集墳(千塚・湯村古墳群-甲府市、赤坂古墳群-双葉町・竜王町)を取り巻くようになる。(第1図)

町内においても戦後間もない頃、4・5基の古墳が確認できたようであるが、現在では荒川右岸沿いに北から大塚古墳(29)と大庭古墳(30)が存在するのみである。ちなみに、松ノ尾遺跡の第I・II次調査ではおそらく荒川の氾濫によるとみられる大規模な流路跡が確認されており、これによって運ばれてきた土砂と考えられる黒色包合層中から金環、勾玉、ガラス玉、切子玉、白玉、銅鏃、鉄鏃、鉄製刀子など古墳の副葬品とも思われるものがあり、中には災害により流されてしまった古墳もあったと考えられる。

当時の人々が暮らしていたとみられる住居跡は、現在松ノ尾遺跡において非常に高い割合で発見されており、周辺遺跡の発掘状況から比べても遺構・遺物が最も集中していることが窺える。とくに、第I、II、V次調査では、住居跡が複雑に重複して確認されており、しかも第II次調査では一辺約7m、第V次調査で一辺約8.5mと約8.0×6.0m、第VII次調査でも一辺約7.7mを測る大型の住居跡が発見されている。

そして、古墳時代の終わりに通称敷島台地の南西部に天狗沢瓦窯(61)が構築され、操業を開始するようになる。出土した瓦や須恵器等から7世紀後半(白鳳期)に位置付けられ、県内最古の瓦窯である。

この時期に併行する集落跡は、松ノ尾遺跡で徐々に確認されてきているが未だその数は少ない状態である。さらに天狗沢瓦窯跡で焼かれた瓦が供給されたであろう寺院跡も残念ながらいまだ発見されていない。

しかし、近年松ノ尾と村統遺跡③で布目瓦などの出土がみられ、今後両遺跡での更なる調査が期待される。

奈良・平安時代 該期の遺構は町内で現在もっとも数が多く、住居跡軒数だけでも100軒以上に上る。

これまでの調査成果をみると、奈良～平安時代初め頃にかけての遺構は未だ検出状況として少なく、むしろ平安時代中頃～末頃にかけて急激に増加をみせる。10・11世紀ごろの集落跡が主体を占めている。

松ノ尾遺跡⑤はこれまでの7回の調査で住居跡37軒と竪穴状遺構10基が確認され、次いで周辺の三味堂遺跡⑥、御岳田遺跡⑦、金の尾遺跡⑧、末法遺跡⑨などでも検出され、その分布の広がりがみられる。

一方、町南部の北側では、山宮地遺跡①、原腰遺跡②などがあり、村統遺跡③では調査面積が約300㎡と狭小であったが計36軒の住居跡が発見され、大規模な集落跡の様相を呈することが分かっている。

各遺跡出土の遺物を見ると、膨大な量の土器と墨書土器をはじめ須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などの陶磁器類、また鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などがある。特殊なものには、松ノ尾遺跡で円面硯(4個体分の破片)、銅製の帯金具などがあり、しかも10～12世紀の早い段階から中国産「貿易陶磁」がもたらされていることが最近明らかとなってきた。器種としては碗、皿、水注などの類が出土している。

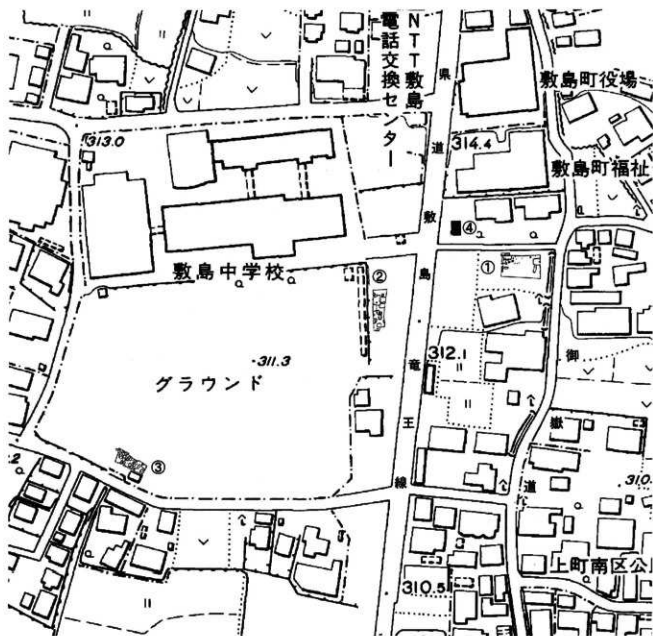
平安時代末頃には、原腰遺跡、村統遺跡、松ノ尾遺跡、御岳田遺跡、不動ノ木遺跡などで集落が営まれていた。中でも、松ノ尾遺跡は金銅製小仏像2軀、村統遺跡では銅製小仏像の台座が1軀出土しており、これらはその出土状態や伴遺物、文様・鑄造方法などからおおよそ11～12世紀代の所産とみられている。

中世 該期の遺構は、山宮地遺跡①と松ノ尾遺跡⑤の2遺跡で、現在発見されている。

松ノ尾遺跡は、第七次調査において一辺約5.2m、最深部約40cmを測り、竪穴内に人為的に石が敷き並べられた竪穴状石組遺構が1基発見され、周辺からは上師質土器や青磁片などが出土していることから、おそらく平安時代末～中世初頭(12～13世紀頃)の遺構とみられている。

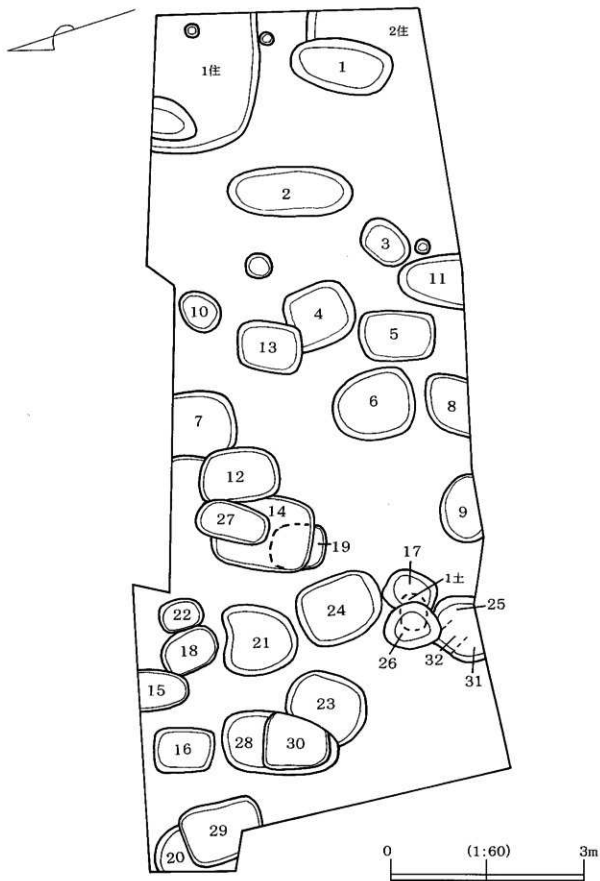
また、山宮地遺跡では15～16世紀に相当する竪穴状遺構や数多くの土壌が近年発見されてきている。

以下山宮地遺跡Ⅲ次調査の成果について報告する。



- ① 第1次調査区 ② 第2次調査区 ③ 第3次調査区

第2図 調査区位地図



第3図 遺構配置図

第2章 遺構と遺物

1. 住居跡(第4図)

1号住居と遺物

調査区東端に位置し、遺構北、東側は調査区外となる。このため本住居の北壁及び東壁は確認できない。平面形は、調査確認範囲で南北1.6m、東西2.2mを測り、方形を呈すと考えられる。壁は西、南壁ともに10cm前後である。柱穴は住居内や東側に1カ所確認され、直径17cm、深さ14cmを測る。

西側には、東西径65cm、深さ35cmの住居内土坑1基が確認された。

遺物は、美濃7小期の折縁輪・鉢の口縁小片1点が出土しているが住居跡に伴うものかは不明。

2号住居と遺物

調査区東端、1号住居の南側に位置する。遺構南、東側は調査区外となる。このため本住居の南壁及び東壁は確認できない。また、北壁から西壁は1号土壇によって切られている。したがって北壁の一部が残存するのみである。残存する北壁は東西55cm、高さ8cmである。床面には一部硬化面が確認できた。

遺物は土師質土器の高台付坏片1点で、残存器高4cmを測る。胎土はキメ細かく緻密、金雲母を多く含む。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2. 土坑

1号土坑

深さ0.18m。17号及び26号の土壇墓と重複関係にある。17号に切られ、26号を切る形で存在していた。遺物、骨片、礫群などは確認されなかった。したがって墓壇か否か明確にできなかったため、土坑とした。

3. 土壇墓

1号土壇墓と遺物

長軸1.53m、短軸0.95m、深さ0.20m。南北に長い楕円形を呈す。遺構南側底面には5~30cm大の礫が認められる。遺物は北側に集中して確認された。16世紀前

- 1 カワラケ小皿。器高1.8cm、口径6.5cm、底径3.9cm。キメ粗く、赤色粒子、長石、金雲母、石英を含む。焼成良好。口縁部煤付着。
- 2 カワラケ小皿。器高2cm、口径8.9cm、底径5.1cm。キメ粗く、赤色粒子、長石、金雲母、石英を含む。焼成良好。口縁部煤付着。
- 3 土師質土器香炉。器高4cm、口径7.7cm、底径5cm。キメ粗く、金雲母、長石を多く含む。底部に貼り付けの三足を有す

2号土壇墓

長軸1.65m、短軸0.75m、深さ0.12m。南北に長い楕円形を呈す。遺構底面全体に5~30cm大の礫群が認められる。遺物は北側覆土下層より銅銭1点が出土している。

3号土壇墓と遺物

南北0.80m、東西0.75m、深さ0.18m。円形を呈す。遺物は遺構確認面で土師器小片7点、須恵器小片1点、また遺構南東部底面より2点の小皿が出土した。確認面出土遺物は本遺構とは関係ないものと考えられる。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高2.2cm、口径8.9cm、底径4.6cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。口辺部横ナデ仕上げ。焼成良好。
- 2 土師質土器皿。器高2.3cm、口径12.4cm、底径6.3cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。口辺部横ナデ仕上げ。焼成良好。

4号土墳墓と遺物

南北1.18m、東西1m、深さ0.34m。方形を呈す。覆上下層より上器4点、銅銭7点が出土した。15世紀末から16世紀初

- 1 カワラケ小皿。器高1.5cm、口径6.6cm、底径4.1cm。キメ細かく緻密で金雲母を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高2.5cm、口径11cm、底径5.6cm。キメ細かく、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 カワラケ皿。器高2.9cm、口径10.7cm、底径6.4cm。キメ細かく、金雲母、長石、石英を含む。焼成良好。内外面に煤付着。
- 4 カワラケ皿。器高2.7cm、口径12cm、底径6.3cm。キメ細かく緻密。金雲母、長石を含む。焼成良好。

5号土墳墓と遺物

長軸1.43m、短軸1.08m、深さ0.24m。南北に細長い楕円形を呈す。遺構北側の覆土下層より陶器小片2点及び銅銭6点が出土している。なお、銅銭は6枚とも接着していた。

- 1 鉄釉陶器片。内面には釉の剥離痕が認められる。
- 2 灰釉陶器壺又は瓶片。古瀬戸後期

6号土墳墓と遺物

長軸1.33m、短軸1.16m、深さ0.30m。南北に長軸をもつやや不整形な楕円形を呈す。遺構確認面では、8～20cmの礫群が確認された。遺物は遺構西側の覆土中に陶器やカワラケ小片、銅銭が認められた。また、東側コーナー付近出土銅銭は2枚接着であった。16世紀前

- 1 硬質土器片。折縁深皿か。推定口径17.8cm
- 2 灰釉陶器端反皿。器高2.3cm、口径8.8cm、底径4.4cm。見込み部にカタバミ印。瀬戸大窯1期。16世紀第1四半期。

7号土墳墓と遺物

南北(1.04m)、東西1.13m、深さ0.20m。南北に長軸をもつ楕円形と考えられる。北側は一部調査区外になり壁は確認できない。また西側は12号と重複する。遺構確認面では10～20cmの礫が敷き詰められるように認められた。遺物は覆土中にカワラケ小片2点と炭化材片1点、南壁際に銅銭1点が出土した。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高1.8cm、推定口径8.4cm、底径5.6cm。キメ細かく、金雲母、長石を含む。焼成良好。口縁部に煤痕付着。

8号土墳墓と遺物

南北(0.6m)、東西0.95m、深さ0.26m。隅丸方形と考えられる。南側は調査区外になり、壁は確認できない。遺物は北東コーナー覆土下層からカワラケ3点(2点縦、1点は伏せて出土)、灰釉陶器片1点が出土した。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高2.5cm、口径9.2cm、底径5cm。キメ細かく、金雲母、長石を含む。赤色粒子を少量含む。焼成良好。

- 2 カワラケ小皿。器高2.3cm、口径10cm、底径5.6cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 ワラケ皿。器高3.25cm、口径11.7cm、底径5.7cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

9号土墳墓と遺物

南北(0.61m)、東西1m、深さ0.40m。隅丸方形と考えられる。南側は調査区外となり、壁は確認できない。覆土中に20cm前後の礫が複数認められた。遺物は礫下よりカワラケなど数点が出土した。また、遺構やや北側の覆土下層より炭化物が認められ、その直下から歯1点が出土した。16世紀前

- 1 カワラケ皿。器高2.9cm、口径11.9cm、底径6.4cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。外面口縁部横ナデ仕上げ。
- 2 硬質土器片。折縁深皿か。推定口径16.4cm

10号土墳墓

南北0.62m、東西0.64m、深さ0.22m。円形を呈す。遺構確認面で20cm前後の礫群を確認した。遺物は出土していない。

11号土墳墓と遺物

南北(0.82m)、東西0.92m、深さ0.22m。南北に長軸をもつ楕円形と考えられる。南側は調査区外となり、壁は確認できない。遺物は土師器長胴甕片が出土しているが周辺の状況から、本遺構に伴うものではないと思われる。

- 1 土師器長胴甕片。推定口径23cm。キメ粗く、長石、雲母を含む。焼成良好。内面横方向、外面縦方向の細かいハケ目を施す。

12号土墳墓と遺物

長軸1.20m、短軸0.81m、深さ0.42m。南北に長軸をもつ楕円形を呈す。遺構西側は14号と27号土墳との切り合い関係にある。遺物はカワラケ類、銅銭2点、歯が出土している。15世紀末

- 1 カワラケ小皿。器高1.6cm、口径6.2cm、底径3.8cm。キメ粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。口縁部に少量の煤痕。
- 2 カワラケ皿。器高2.7cm、推定口径11.6cm、推定底径6.6cm。キメ細かく、黒色粒子、金雲母を含む。焼成良好。口縁部横ナデ仕上げ。
- 3 カワラケ皿。器高2.8cm、口径11.5cm、底径5.9cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。口縁部横ナデ仕上げ。
- 4 カワラケ皿。器高2.8cm、推定口径10.7cm、推定底径6cm。キメ細かく緻密。金雲母を含む。焼成良好。

13号土墳墓と遺物

長軸0.94m、短軸0.70m、深さ0.29m。南北に長軸をもつ隅丸方形を呈す。遺構中央から北側にかけて20cm前後の礫4点が覆土下層で確認された。遺物は遺構北西付近を中心に円形土製品1点、銅銭5点が確認された。銅銭1に3点、銅銭2に2点の接着が認められた。

- 1 土製品。円形で直径2.3cm、厚さ0.5cm。キメ細かく緻密。中央に径0.4cmの円孔を有す。

14号土墳墓

長軸1.50m、短軸1.09m、深さ0.39m。南北に長軸をもつ長方形を呈す。遺構北側は27号土墳、南側は19号土墳、東側は12号土墳と重複する。重複関係の中でもっとも新しい遺構と思われる。遺構確認面において、北側に12~40cmの礫5点が確認された。また、遺構底面北側に人頭骨、中央から南にかけて人骨が確認された。骨の残存は悪く性別が確認できる部位は認められなかった。遺物は人頭骨直上に銅銭6点が接着した状態で出土している。

15号土墳墓

南北(0.88m)、東西0.75m、深さ0.26m。南北に長軸をもつ楕円形と考えられる。遺構北側は調査区外となるため北壁は確認されなかった。覆土下層より人骨片が出土している。

16号土墳墓

南北0.86m、東西0.79m、深さ0.14m。方形を呈す。遺物は西壁北側覆土下層より銅銭1点が出土。

17号土墳墓と遺物

南北1.0m、東西0.83m、深さ0.16m。方形を呈す。遺構西側は1号土坑、26号土墳と重複する。遺物はカワラケ、銅銭6点が遺構中央から西側にかけて覆土下層より出土している。銅銭1が3点、銅銭3が2点の接着である。また、人骨、歯も遺物周辺より出土している。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高2.1cm、口径8.1cm、底径4.4cm。キメやや細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ小皿。器高1.8cm、口径7cm、底径4cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。内外面口縁部煤付着。
- 3 カワラケ皿。器高2.5cm、口径11.2cm、底径5.8cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

18号土墳墓

長軸0.89m、短軸0.62m、深さ北側0.27m、南側0.21m。やや南北に長軸をもつ方形を呈す。遺構北側に直径0.45m、深さ0.27mの窪みをもつ。中央部に径20cmの礫1点が認められた。遺物はなく、覆土中より歯が出土している。

19号土墳墓と遺物

南北0.85m、東西0.72m、深さ0.42m。円形を呈す。遺構は殆どが14号土墳によって切られており、北壁は僅かに0.10mを残すのみである。遺構中央部底面直上より銅銭4点(銅銭1に3点接着)、覆土中よりカワラケ片、北側底面直上より人頭骨片、西壁及び南壁より人骨片が出土している。16世紀中

- 1 カワラケ皿。器高2.8cm、推定口径12cm、推定底径7cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。推定口径10cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

20号土墳墓と遺物

南北0.5m、東西0.7m、深さ0.32m。遺構南側は29号土墳によって切られている。西側は調査区外となる。したがって南壁及び西壁は確認できない。遺構形状不明。遺物はカワラケ、銅銭が出土している。16世紀前

- 1 カワラケ小皿。器高1.3cm、口径7.1cm、底径5cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高2.8cm、口径10.4cm、底径5.5cm。キメ細かく緻密。焼成良好。
- 3 カワラケ皿。器高2.7cm、推定口径10cm、推定底径5.6cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 4 カワラケ皿。器高2.6cm、口径10.5cm、底径5.7cm。キメ細かく緻密。黒色粒子、金雲母を含む。長石を少量含む。焼成良好。
- 5 カワラケ皿。器高2.6cm、口径12.8cm、底径6.4cm。キメ細かく緻密。金雲母、長石を含む。赤色粒子を少量含む。焼成良好。

21号土壌墓と遺物

長軸1.60m、短軸1.30m、深さ0.50m。不整形。遺構北側には幅0.20mのテラス状の段をもつ。遺構中央部覆土中に五輪塔の火輪1点、人骨、歯が出土している。

22号土壌墓と遺物

南北0.65m、東西0.55m、深さ0.25m。西側は18号土壌と切り合い関係にある。円形を呈す。遺物は東側を中心にカワラケ、南北に銅銭が出土している。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高1.8cm、口径7cm、底径4cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ小皿。器高1.9cm、口径7.4cm、底径3.8cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 カワラケ皿。器高2.9cm、口径11.4cm、底径6cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 4 カワラケ皿。器高2.7cm、口径11.9cm、底径6cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

23号土壌墓と遺物

南北1.20m、東西1.15m、深さ0.40m。やや方形に近い円形を呈す。西側は28号土壌、30号土壌との切り合い関係になる。遺構確認面には20～30cmの礫が一面に確認された。この礫に混じって五輪塔の火輪1点が出土している。遺物は底面直上においてカワラケ、陶器が出土している。16世紀前から中

- 1 カワラケ皿。器高2.6cm、推定口径11.4cm、底径6.3cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高2.5cm、推定口径10.6cm、推定底径5.4cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 土師質土器香炉。推定口径11cm。キメ細かく緻密。金雲母を含む。足の一部が看取される。焼成良好。
- 4 灰釉陶器端反皿。器高2.6cm、口径10.6cm、底径6.2cm。見込み部に菊花印。瀬戸大窯1期。16世紀第1四半期。

24号土壌墓と遺物

南北1.27m、東西1.13m、深さ0.20m。隅丸方形を呈す。遺構確認面において20～45cmの礫が9点確認された。遺物は覆土下層中にカワラケ、銅銭7点（1に4点、2に3点接着）が出土。また人骨、歯も確認されている。16世紀中

- 1 カワラケ皿。器高2.65cm、口径12.2cm、底径6.8cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 陶器甕。常滑焼
- 3 陶器甕。常滑焼
- 4 土師質土器香炉。推定口径7cm。キメ細かく緻密。金雲母、長石を含む。

25号土墳墓と遺物

南北(1.0m)、東西(0.70m)、深さ0.38m。遺構南側は調査区外となるため南壁は確認できない。また北側は一帯に26号土墳墓によって切られている。さらに、西側は31号土墳と重複関係にあり遺構の東西規模は確認できなかった。遺物は東側覆土下層においてカワラケ1点、銅銭8点(すべて接着)が出土している。また、骨片が確認されている。16世紀中

- 1 カワラケ皿。器高2.7cm、口径10cm、底径5.2cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。外面底部から体部の一部にかけて煤による黒色。焼成良好。

26号土墳墓

南北1.05m、東西1m、深さ0.30m。円形を呈す。17号土墳、25号土墳、32号土墳を切って存在する。遺物はなく、覆土中に人骨片、歯が確認された。

27号土墳墓と遺物

長軸1.30m、短軸(0.82m)、深さ0.5m。南北に長軸をもつ楕円形を呈すと考えられる。遺構南側は14号土墳によって切られているが、遺構下場は残存していた。遺物は南東部底面よりカワラケ皿、中央及び西壁底面より銅銭6点(1に5点接着)が出土した。また北側中央に頭骨片、北及び南側中央に人骨片が確認された。16世紀初

- 1 カワラケ皿。器高2.7cm、口径11.8cm、底径6.3cm。キメ細かく緻密。赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

28号土墳墓と遺物

長軸1.90m、短軸1m、深さ0.22m。南北に長軸をもつ楕円形を呈す。覆土は1層で、本遺構底面下に30号土墳が確認されたことから、30号を切って本土墳が構築されたと考えられる。遺構確認面では20cm前後の礫とともに、五輪塔の風輪1点、地輪6点が確認された。遺物は遺構北側底面でカワラケ皿、銅銭8点(1に3点接着)が出土した。また北側覆土中より頭骨片、歯が確認されている。16世紀前

- 1 カワラケ皿。器高2.5cm、口径12.1cm、底径5.8cm。キメ細かく緻密。黒色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。推定底径7cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

29号土墳墓と遺物

長軸1.38m、短軸1m、深さ0.5m。南北に長軸をもつ隅丸方形。遺構南西側は調査区外となる。また、西側には別の遺構に伴うと考えられる礎群が認められた。このため29号土墳西側の壁は底面立ち上りの下場線の確認にこどまった。

遺構確認面では、20~30cm前後の礫が中央部を中心に確認された。この礫に混ざって五輪塔の火輪2点、地輪1点を確認されている。また覆土下層よりカワラケ皿3点、銅銭9点(No.1, 2, 3に各3点接着)が出土している。16世紀中

- 1 カワラケ小皿。器高1.7cm、口径6.6cm、底径3.6cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高2.8cm、口径11.3cm、底径5.6cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 カワラケ皿。器高2.8cm、口径12.4cm、底径6cm。キメやや粗く、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

30号土壌墓と遺物

南北1.20m、東西0.9m、深さ(0.25m)。南北に長軸をもつ隅丸方形を呈す。遺構全体は28号土壌によって削平されており、明確な深さは確認できないが、底面から0.25mの立ち上がりは認められた。また、28号底面との切り合い部分で地輪2点、20cm前後の礎3点を確認した。礎類については、両土壌いずれのものとも判断が難しい。遺物は、北側を中心にカワラケ類が出土している。銅銭は6点(No.1、2各3点接着)である。15世紀末

- 1 カワラケ小皿。器高1.6cm、口径7.2cm、底径4cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高2.6cm、口径11.4cm、底径6.1cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 カワラケ皿。器高2.7cm、口径11.9cm、底径4.7cm。キメ細かく、黒色粒子、長石、石英を含む。焼成良好
- 4 カワラケ皿。器高2.7cm、推定口径12cm、推定底径8cm。キメ細かく赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 5 カワラケ皿。器高2.5cm、推定口径12cm、底径7cm。キメ細かく、赤色粒子、金雲母、長石を含む。焼成良好。

31号土壌墓

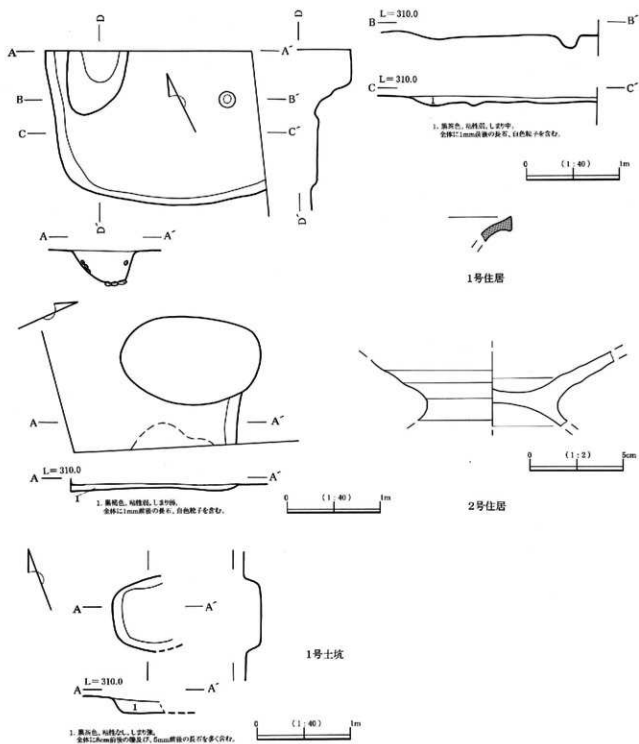
25号、32号の土壌と重複関係にあり、また南は調査区外となる。このため本土壌は西側壁南北0.66mと西壁から東へ0.7m範囲のみの残存である。深さは調査可能範囲で0.36mである。形状不明。遺物は銅銭6点(全て接着)。骨片、歯が検出されている。

32号土壌墓

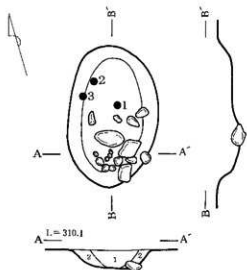
25号、26号、31号各土壌と重複関係にある。したがって残存部分は北西壁0.5mのみである。壁部分深さは0.26m。銅銭3点(全て接着)が出土している。また覆土中より骨片、歯が検出された。

4. 遺構外遺物

- 1 土師器甕。推定口径25.2cm。キメ粗く、長石、雲母を含む。外面体部縦方向、内面口辺部から体部にかけて横方向のハケ目。焼成良好。
- 2 カワラケ皿。器高3.3cm、口径12.6cm、底径6.2cm。キメ細かく、金雲母、長石を含む。焼成良好。
- 3 灰釉陶器播鉢。瀬戸大窯1期の可能性がある。
- 4 灰釉陶器端反皿か丸皿。瀬戸大窯1期の可能性がある。
- 5 磁器、近世。

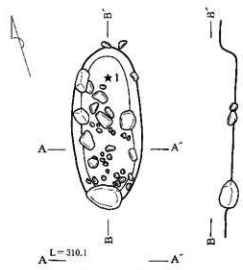


第4図 1・2号住居跡と1号土坑



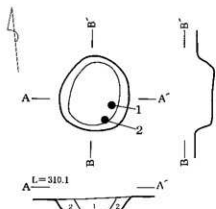
1. 黒褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の小石を含む。
2. 茶褐色、粘状性、しどろひ、
5mm程度の糸状菌を含む。

1号土壌巣



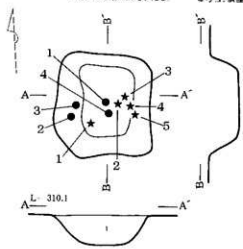
1. 茶褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の小石を含む。

2号土壌巣



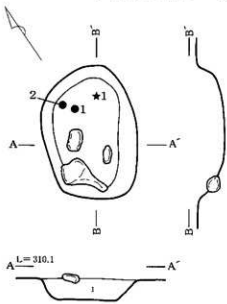
1. 暗褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の糸状菌を含む。
2. 茶褐色、粘状性、しどろひ、
5mm程度の糸状菌を含む。

3号土壌巣



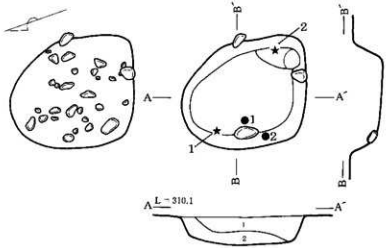
1. 黒褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の糸状菌を含む。

4号土壌巣



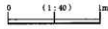
1. 黒褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の糸状菌を含む。

5号土壌巣

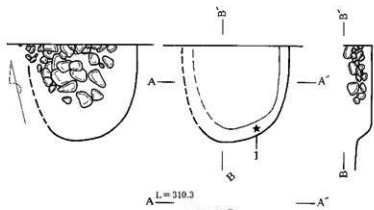


1. 黒褐色、粘状性、しどろひ、
真砂色に多少の個人するほどの小石。
2. 茶褐色、粘状性、しどろひ、
全長に3mm程度の糸状菌、多数の糸状菌を含む。

6号土壌巣

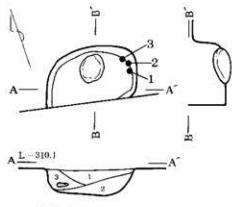


第5図 1~6号土壌巣



1. 褐色土、粘質土、L300級、
黄褐色土が中心部より外縁に広がる。

7号土墳墓

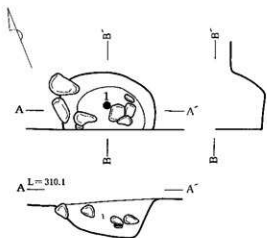


1. 黄褐色、粘質土、L300級、
黄褐色土が中心部より外縁に広がる。

2. 黄褐色、粘質土、L300級、
全長に20cm程度の溝が、半周縁を走る。

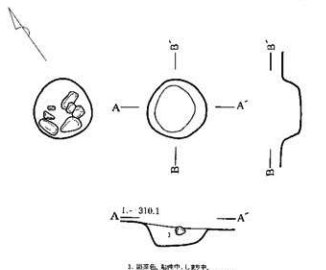
3. 黄褐色、粘質土、L300級、
黄褐色粘質土が中心部に広がる。

8号土墳墓



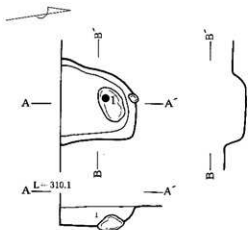
1. 黄褐色、粘質土、L300級、
全縁に20cm程度の溝が中心部に走る。

9号土墳墓



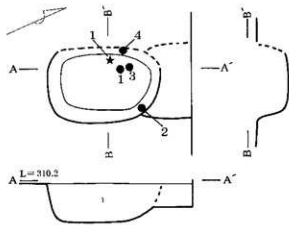
1. 黄褐色、粘質土、L300級、
全縁に20cm程度の溝が中心部に走る、
黄褐色土が中心部に広がる。

10号土墳墓



1. 黄褐色、粘質土、L300級、
全縁に20cm程度の溝が中心部に走る、
20cm程度の溝が中心部に走る。

11号土墳墓

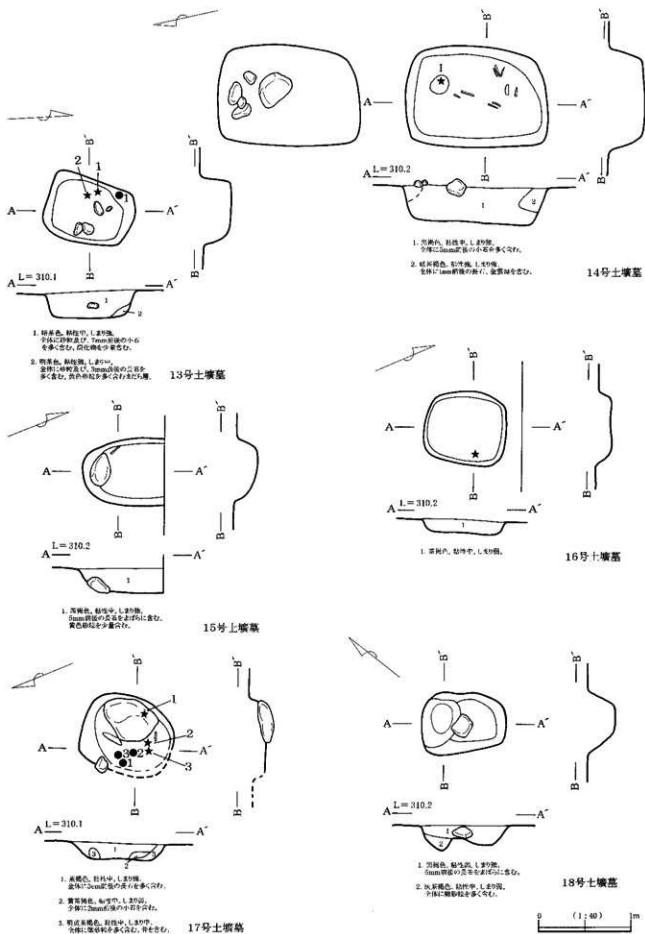


1. 黄褐色、粘質土、L300級、
全縁に黄褐色土が中心部に広がる、
20cm程度の溝が中心部に走る。

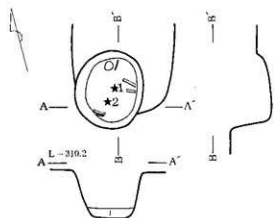
12号土墳墓



第6図 7~12号土墳墓

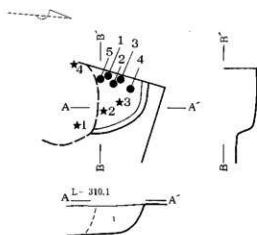


第7図 13~18号土壇蓋



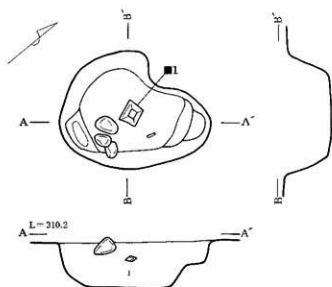
1. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり

19号土塚墓



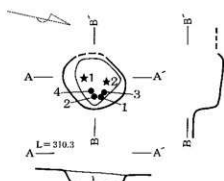
1. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり

20号土塚墓



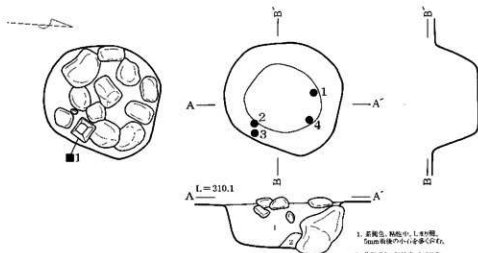
1. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり

21号土塚墓



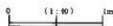
1. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり

22号土塚墓

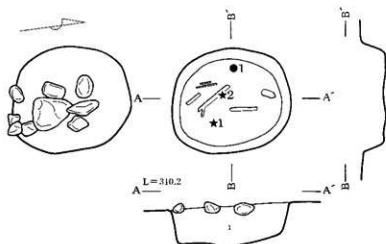


1. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり
2. 断面内、柱状物、土室中央部に50mm程度の突起あり

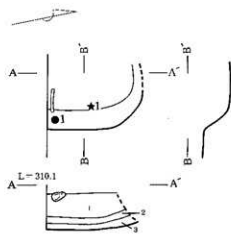
23号土塚墓



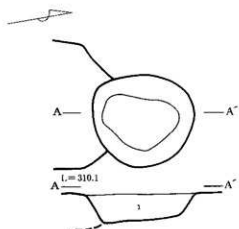
第8図 19~23号土塚墓



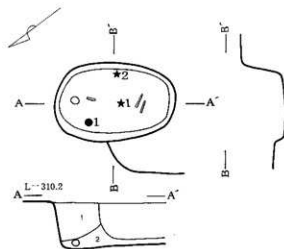
1. 黒褐色、粘り中、しじり強。
10mm~20mmの小礫をばらばらに含む。 24号土壌墓



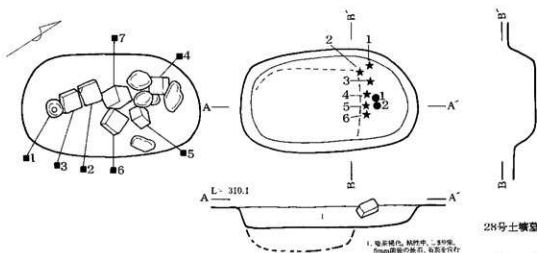
1. 暗赤褐色、均質中、しじり弱。
平均20mm程度の小礫を多く含む。
2. 黄赤褐色、粘り中、しじり中。
少量に砂粒を多く含む。
3. 暗赤褐色、粘り中、しじり強。
層状構造あり、黄色砂粒の混入あり。 25号土壌墓



1. 暗赤褐色、粘り中、しじり中。
少量に20mm程度の小礫を多く含む。 26号土壌墓

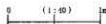


1. 黄赤褐色、粘り中、しじり強。
不均質中、黄褐色砂粒の混入あり。
2. 暗赤色、粘り中、しじり中。
少量に砂粒を多く含む。 27号土壌墓

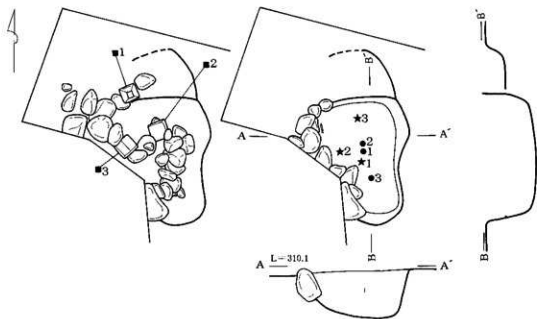


28号土壌墓

1. 暗赤褐色、粘り中、しじり強。
5mm程度の砂粒、石灰を含有

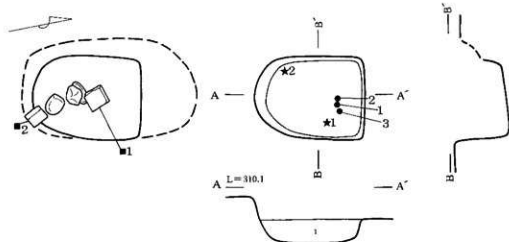


第9図 24~28号土壌墓



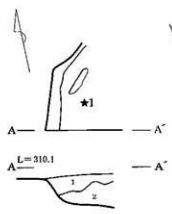
1. 赤黒褐色、粘状土、L200、
黒褐色アタラシをまじり込む。

29号土壌墓



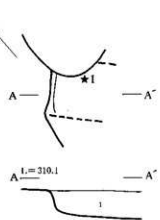
1. 赤黒褐色、粘状土、L200、
50cm前後の穴をまじり込む。

30号土壌墓



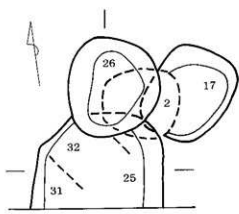
1. 赤黒褐色、粘状土、L200、
黒心、石灰を多く含む砂状土。
2. 黒褐色、粘状土、L200、
50cm前後の小石を多く含む。

31号土壌墓

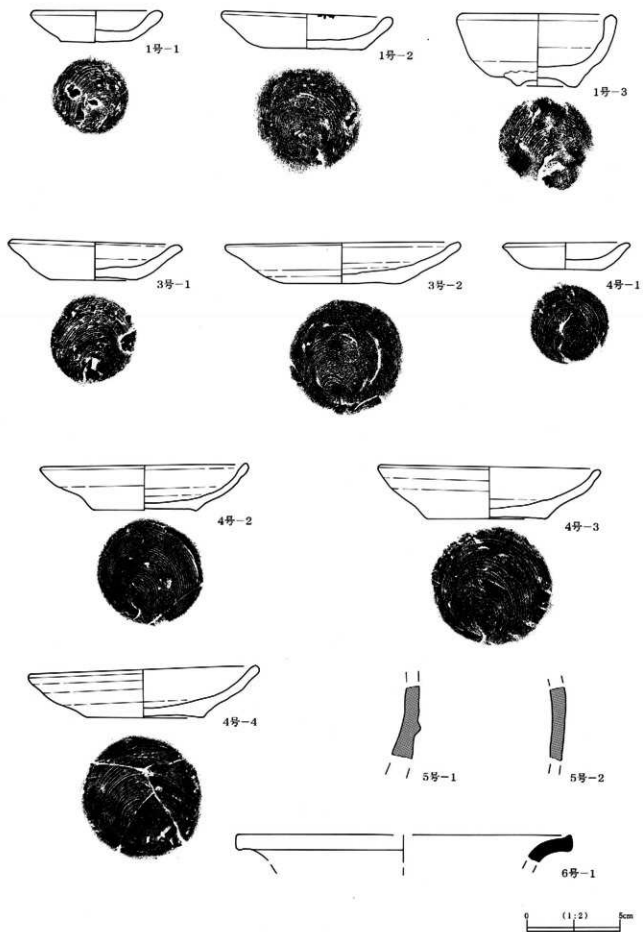


1. 赤黒褐色、粘状土、L400、
黒心、石灰を多く含む砂状土。

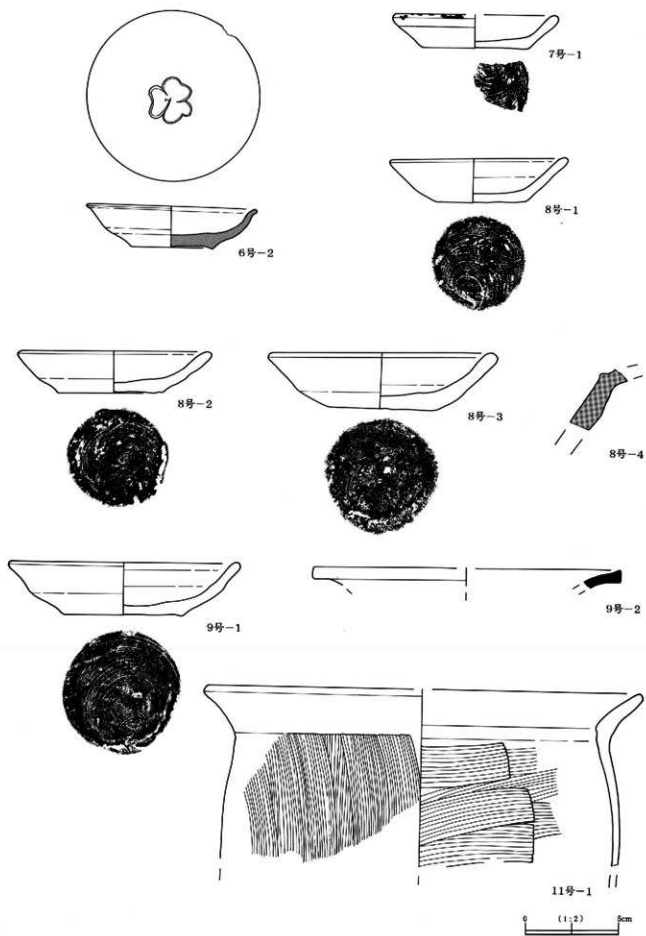
32号土壌墓



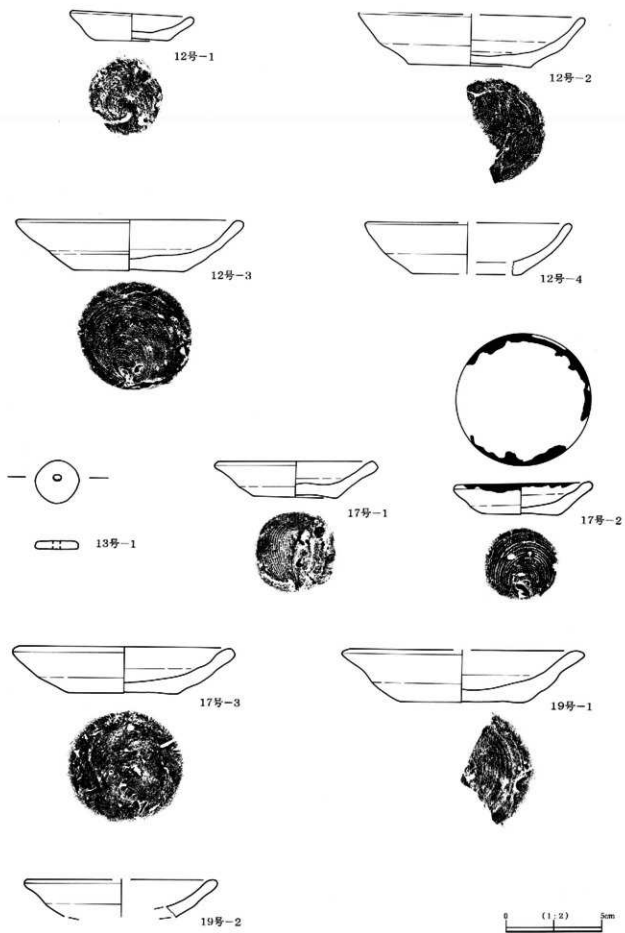
第10図 29~32号土壌墓



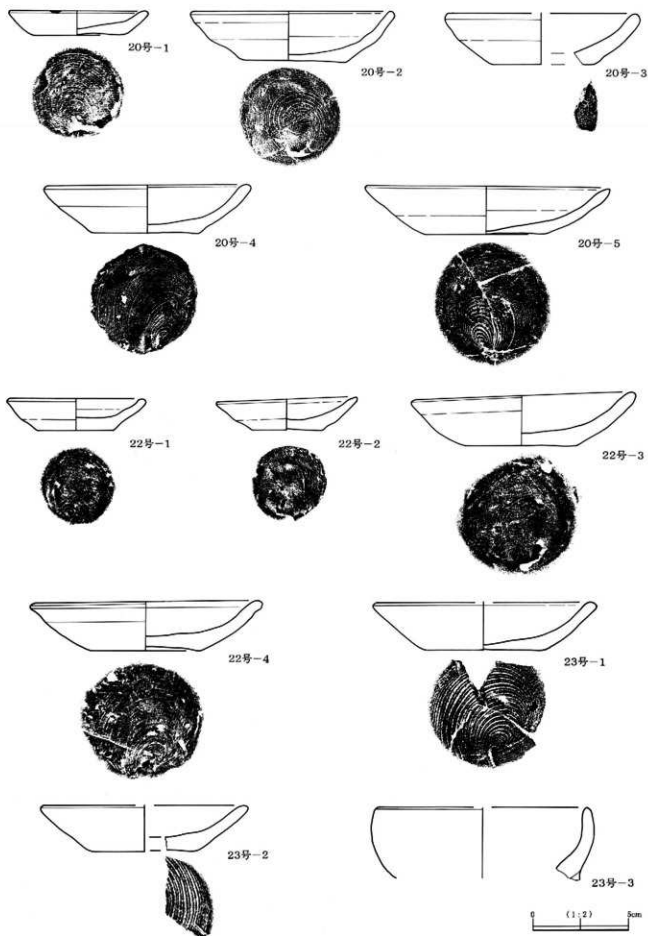
第11图 1~6号土坑墓出土土器



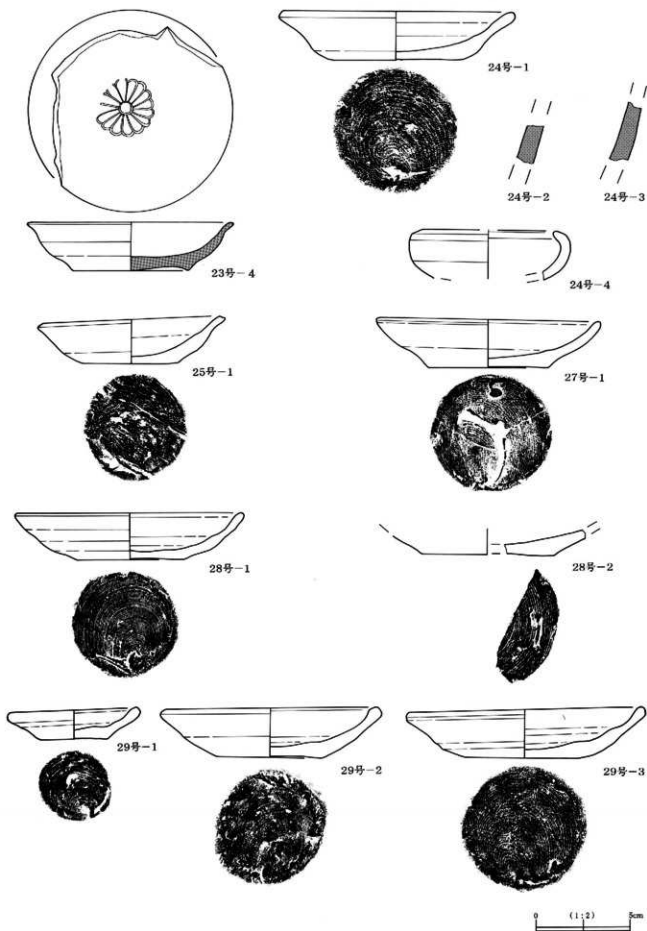
第 12 图 6~11 号土坑墓出土土器



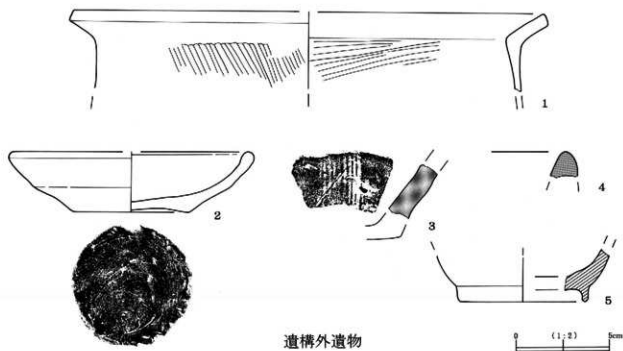
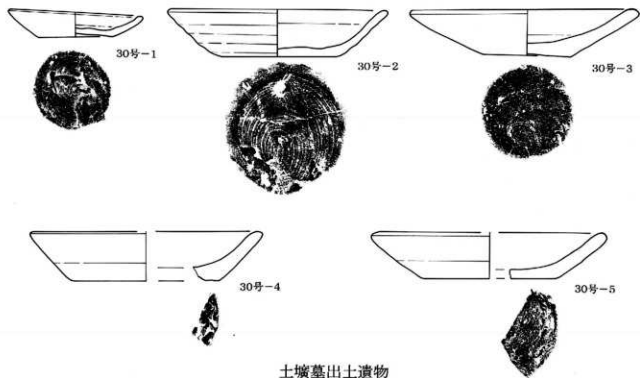
第 13 图 12~19 号土坑墓出土土器



第14图 20~23号土坑墓出土土器



第 15 图 23~29 号土坑墓出土土器



第 16 圖 30 号土坡墓・遺構外出土土器・鉄製品

5. 銅 銭

今回の調査では、21の土壌墓から112点、遺構外2点、合計114点の銅銭が出土した。

第1表 銅銭観察表1

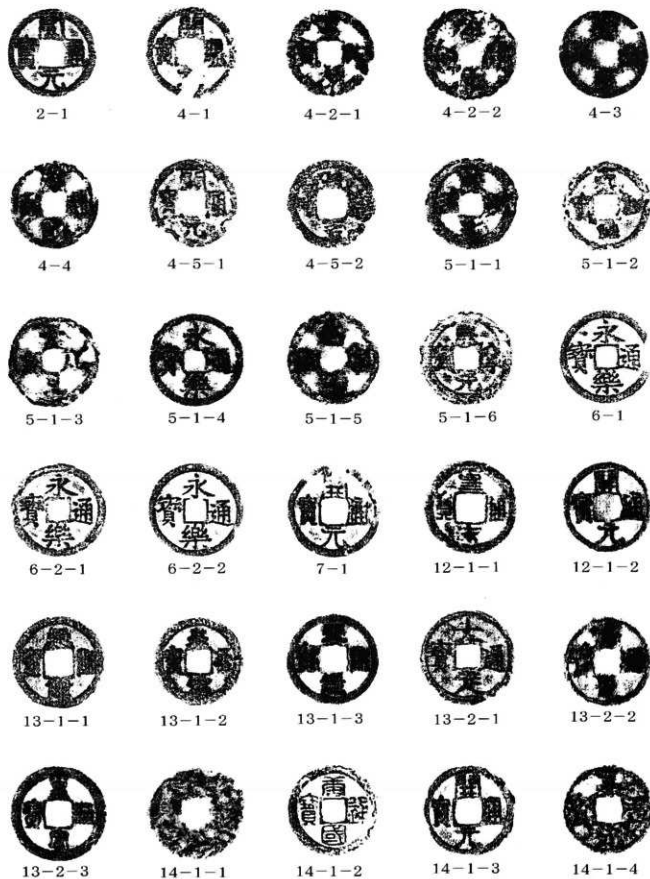
No	銭貨名	時代	初鑄年	外縁径	内縁径	厚さ	備考
2-1	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.385 cm	2.900 cm	1.11 mm	
4-1	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.470 cm	2.100 cm	1.40 mm	
4-2-1	(開)元(通)寶	唐	武徳4年(621年)	2.400 cm		1.11 mm	4-2-2と付着
4-2-2	不明			2.492 cm		1.45 mm	4-2-1と付着
4-3	不明			2.371 cm	1.981 cm	1.19 mm	
4-4	不明			2.389 cm		1.12 mm	
4-5-1	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.410 cm	2.098 cm	1.25 mm	4-5-2と付着
4-5-2	(開)元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.420 cm	2.005 cm	1.11 mm	4-5-1と付着
5-1-1	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086年)	2.482 cm	1.920 cm	1.21 mm	5-1-1から
5-1-2	宣徳通寶	明	宣徳8年(1433年)	2.420 cm	2.015 cm	1.39 mm	5-1-6まで付着
5-1-3	(景)徳元寶	北宋	景徳元年(1004年)	2.489 cm		0.95 mm	
5-1-4	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.531 cm	2.181 cm	1.45 mm	
5-1-5	元(祐)通寶	北宋	元祐元年(1086年)	2.490 cm		1.45 mm	
5-1-6	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.471 cm	1.850 cm	1.50 mm	
6-1	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.511 cm	2.080 cm	1.45 mm	
6-2-1	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.529 cm	2.132 cm	1.31 mm	6-2-2と付着
6-2-2	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.500 cm	2.140 cm	1.19 mm	6-2-1と付着
7-1	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.539 cm	2.159 cm	1.05 mm	
12-1-1	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.471 cm	2.065 cm	0.95 mm	12-1-2と付着
12-1-2	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.411 cm	2.089 cm	0.99 mm	12-1-1と付着
13-1-1	(天)聖(元)寶	北宋	天聖元年(1023年)	2.471 cm	2.085 cm	1.10 mm	13-1-1から
13-1-2	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.339 cm	1.865 cm	1.00 mm	13-1-3まで付着
13-1-3	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023年)	2.444 cm	2.059 cm	1.10 mm	
13-2-1	大定通寶	金	大定18年(1178年)	2.531 cm	2.165 cm	1.22 mm	13-2-1から
13-2-2	() () 寶			2.361 cm	2.090 cm	1.09 mm	13-2-3まで付着
13-2-3	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.549 cm	1.949 cm	1.10 mm	
14-1-1	聖宋元寶	北宋	建中靖国元年(1101年)	2.485 cm		1.11 mm	14-1-1から
14-1-2	唐()通寶			2.470 cm	1.975 cm	1.10 mm	14-1-6まで付着
14-1-3	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.425 cm	1.989 cm	1.45 mm	
14-1-4	(大)定通寶	金	大定18年(1178年)	2.452 cm		1.15 mm	
14-1-5	明道元寶	北宋	明道元年(1032年)	2.385 cm	2.085 cm	1.35 mm	
14-1-6	大定通寶	金	大定18年(1178年)	2.531 cm	2.141 cm	1.45 mm	
16-1	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.549 cm	2.095 cm	0.85 mm	
17-1-1	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.401 cm	2.051 cm	1.10 mm	17-1-1から
17-1-2	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.430 cm	2.091 cm	1.39 mm	17-1-3まで付着
17-1-3	開元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.321 cm	1.935 cm	1.50 mm	
17-2	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.365 cm	2.093 cm	1.05 mm	
17-3-1	宣徳通寶	明	宣徳8年(1433年)	2.491 cm	2.105 cm	1.10 mm	17-3-2と付着

第2表 銅銭観察表2

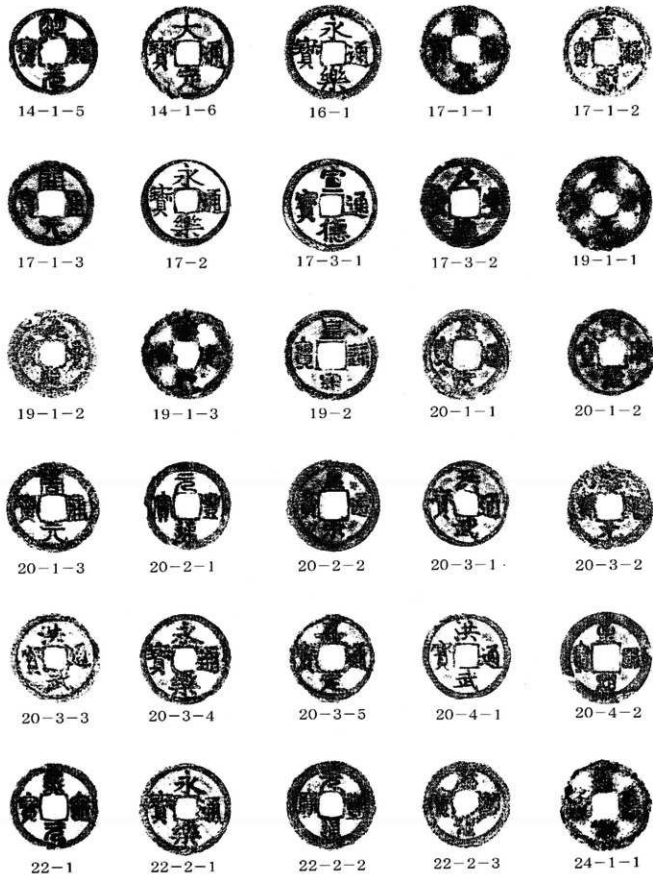
No	銭貨名	時代	初鑄年	外縁径	内縁径	厚さ	備考
17-3-2	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.445 cm	1.982 cm	1.21 mm	17-3-1と付着
19-1-1	() () 元寶			2.530 cm	1.815 cm	1.39 mm	19-1-1 から
19-1-2	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.415 cm	1.815 cm	1.39 mm	19-1-3 まで付着
19-1-3	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.465 cm		1.23 mm	
19-2	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.490 cm	2.035 cm	1.90 mm	
20-1-1	() () () 寶			2.470 cm	1.815 cm	1.05 mm	20-1-1 から
20-1-2	聖宋元寶	北宋	建中靖国元年(1101年)	2.350 cm	2.041 cm	1.25 mm	20-1-3 まで付着
20-1-3	周通寶	後周	顯徳2年(955年)	2.446 cm	1.972 cm	1.40 mm	
20-2-1	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.355 cm	1.889 cm	1.45 mm	20-2-2 と付着
20-2-2	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.480 cm	1.899 cm	0.99 mm	20-2-1 と付着
20-3-1	洪武通寶	明	洪武元年(1368年)	2.320 cm	1.955 cm	1.99 mm	20-3-1 から
20-3-2	淳熙元寶	南宋	淳熙元年(1174年)	2.379 cm		1.19 mm	20-3-5 まで付着
20-3-3	洪武通寶	明	洪武元年(1368年)	2.420 cm	2.021 cm	1.39 mm	
20-3-4	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.479 cm	2.121 cm	1.22 mm	
20-3-5	嘉定通寶	南宋	嘉定元年(1208年)	2.320 cm	2.049 cm	1.29 mm	
20-4-1	洪武通寶	明	洪武元年(1368年)	2.380 cm	2.010 cm	1.58 mm	20-4-2 と付着
20-4-2	至和通寶	北宋	至和元年(1054年)	2.480 cm	1.910 cm	1.35 mm	20-4-1 と付着
22-1	(聖)(宋)元寶	北宋	建中靖国元年(1101年)	2.349 cm	1.951 cm	1.10 mm	
22-2-1	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.461 cm	2.070 cm	1.00 mm	22-2-1 から
22-2-2	元(豊)(通)寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.400 cm	1.865 cm	0.99 mm	22-2-3 まで付着
22-2-3	() () 元寶			2.350 cm	1.955 cm	1.30 mm	
24-1-1	不明			2.459 cm		1.50 mm	24-1-1 から
24-1-2	(宋)(通)元寶	北宋	建隆元年(960年)	2.535 cm		1.32 mm	24-1-4 まで付着
24-1-3	不明			2.460 cm		1.25 mm	
24-1-4	() () () 寶						
24-2-1	() () () 寶			2.430 cm	1.920 cm	1.59 mm	24-2-1 から
24-2-2	宣徳通寶	明	宣徳8年(1433年)	2.541 cm	2.110 cm	1.29 mm	24-2-3 まで付着
24-2-3	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.500 cm	2.500 cm	1.60 mm	
25-1-1	政和通寶	北宋	政和元年(1111年)	2.361 cm	2.039 cm	1.05 mm	25-1-1 から
25-1-2	() (宋) 元寶			2.401 cm	1.975 cm	1.35 mm	25-1-8 まで付着
25-1-3	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068年)	2.515 cm	2.000 cm	1.55 mm	
25-1-4	不明			2.400 cm	1.820 cm	1.19 mm	
25-1-5	() () () 寶			2.395 cm		1.25 mm	
25-1-6	治平元寶	北宋	治平元年(1064年)	2.391 cm		1.12 mm	
25-1-7	不明			2.610 cm		1.15 mm	
25-1-8	宣徳通寶	明	宣徳8年(1433年)	2.530 cm	2.140 cm	1.10 mm	
27-1-1	洪武通寶	明	洪武元年(1368年)	2.440 cm	1.936 cm	1.52 mm	27-1-1 から
27-1-2	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.525 cm	1.885 cm	1.09 mm	27-1-6 まで付着

第3表 銅銭観察表3

No	銭貨名	時代	初鑄年	外縁径	内縁径	厚さ	備考
27-1-3	()元寶			2.449 cm	1.965 cm	1.55 mm	27-1-1 から
27-1-4	宣和通寶	北宋	宣和元年(1119年)	2.410 cm	1.949 cm	1.60 mm	27-1-6 まで付着
27-1-5	(宣)(和)通寶	北宋	宣和元年(1119年)	2.430 cm	2.060 cm	1.69 mm	
27-2	洪武通寶	明	洪武元年(1368年)	2.462 cm	2.100 cm	1.24 mm	
28-1-1	嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年(1056年)	2.471 cm	1.941 cm	0.85 mm	28-1-1 から
28-1-2	祥符通寶	北宋	祥符元年(1009年)	2.396 cm	1.960 cm	1.21 mm	28-1-3 まで付着
28-1-3	(開)(元)通寶	唐	武徳4年(621年)	2.272 cm	1.989 cm	1.12 mm	
28-2	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.541 cm	2.150 cm	1.41 mm	
28-3	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.391 cm	1.850 cm	1.15 mm	
28-4	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.584 cm	2.095 cm	1.60 mm	
28-5	祥符通寶	北宋	祥符元年(1009年)	2.470 cm	1.820 cm	1.35 mm	
28-6	正隆元寶	金	正隆2年(1157年)	2.510 cm	2.145 cm	1.35 mm	
29-1-1	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.361 cm	1.950 cm	1.09 mm	29-1-1 から
29-1-2	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.450 cm	2.030 cm	1.61 mm	29-1-3 まで付着
29-1-3	元()通寶			2.511 cm	1.865 cm	1.51 mm	
29-2-1	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.461 cm	2.122 cm	1.10 mm	29-2-1 から
29-2-2	元符通寶	北宋	元符元年(1098年)	2.380 cm	1.779 cm	1.20 mm	29-2-3 まで付着
29-2-3	永楽通寶	明	永楽6年(1408年)	2.500 cm	2.090 cm	1.10 mm	
29-3-1	淳()元寶			2.404 cm	1.730 cm	1.45 mm	29-3-1 から
29-3-2	淳()元寶			2.439 cm	1.810 cm	1.39 mm	29-3-3 まで付着
29-3-3	淳()元寶			2.390 cm	1.825 cm	1.21 mm	
30-1-1	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.461 cm	1.942 cm	1.15 mm	
30-1-2	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.485 cm	1.832 cm	1.20 mm	
30-1-3	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.379 cm	1.905 cm	1.39 mm	
30-2-1	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023年)	2.529 cm	2.002 cm	1.30 mm	30-2-1 から
30-2-2	治平通寶	北宋	治平元年(1064年)	2.505 cm	1.925 cm	1.70 mm	30-2-3 まで付着
30-2-3	()()元寶			2.400 cm	1.959 cm	1.48 mm	
31-1-1	()元通寶			2.535 cm	2.145 cm	1.10 mm	31-1-1 から
31-1-2	元祐通寶	北宋	元祐8年(1093年)	2.563 cm	2.135 cm	0.90 mm	31-1-6 まで付着
31-1-3	(開)元通寶	唐	武徳4年(621年)	2.435 cm		1.20 mm	
31-1-4	()元通寶			2.482 cm	1.951 cm	1.55 mm	
31-1-5	元祐通寶	北宋	元祐8年(1093年)	2.412 cm	1.904 cm	1.30 mm	
31-1-6	(開)(元)通寶	唐	武徳4年(621年)	2.331 cm	1.935 cm	1.09 mm	
32-1-1	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.482 cm	1.829 cm	1.21 mm	32-1-1 から
32-1-2	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068年)	2.489 cm	1.899 cm	1.05 mm	32-1-3 まで付着
32-1-3	()宋元寶			2.459 cm	1.955 cm	1.05 mm	
遺構外	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078年)	2.411 cm	1.985 cm	1.11 mm	
遺構外	皇宋通寶	北宋	宝元元年(1038年)	2.391 cm	2.135 cm	0.95 mm	



第 17 圖 2~14 号土坑墓出土銅錢



第 18 图 14~24 号土坑墓出土铜钱



24-1-2



24-1-3



24-1-4



24-2-1



24-2-2



24-2-3



25-1-1



25-1-2



25-1-3



25-1-4



25-1-5



25-1-6



25-1-7



25-1-8



27-1-1



27-1-2



27-1-3



27-1-4



27-1-5



27-2



28-1-1



28-1-2



28-1-3



28-2



28-3



28-4



28-5



28-6



29-1-1



29-1-2

第19图 24~29号土坑墓出土铜钱



29-1-3



29-2-1



29-2-2



29-2-3



29-3-1



29-3-2



29-3-3



30-1-1



30-1-2



30-1-3



30-2-1



30-2-2



30-2-3



31-1-1



31-1-2



31-1-3



31-1-4



31-1-5



31-1-6



32-1-1



32-1-2



32-1-3



造構外



造構外

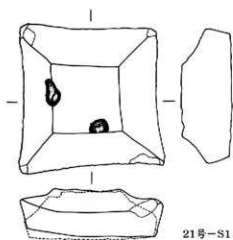
第20圖 29~32号土墳墓出土銅銭

6. 五輪塔

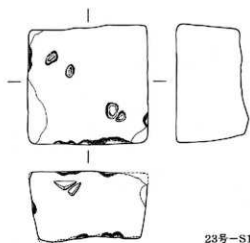
今回の調査において風輪1、火輪5、地輪15の合計21点の五輪塔部材が出土した。なお遺構外出土とした火輪2、地輪5については本来土壌墓に伴もなうものであったが試掘調査のさい重機によって移動してしまったため遺構外として扱った。

第4表 五輪塔観察表

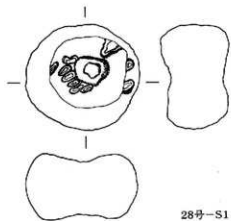
遺構名	五輪塔NO	部位	備考
21号土壌墓	21号-S1	火輪	
23号土壌墓	23号-S1	地輪	
28号土壌墓	28号-S1	風輪	
28号土壌墓	28号-S2	地輪	
28号土壌墓	28号-S3	地輪	
28号土壌墓	28号-S4	地輪	
28号土壌墓	28号-S5	地輪	墨書有り
28号土壌墓	28号-S6	地輪	
28号土壌墓	28号-S7	地輪	墨書有り
29号土壌墓	29号-S1	火輪	
29号土壌墓	29号-S2	火輪	
29号土壌墓	29号-S3	地輪	
30号土壌墓	30号-S1	地輪	
30号土壌墓	30号-S2	地輪	
一括	一括-S1	火輪	
一括	一括-S2	火輪	
一括	一括-S3	地輪	
一括	一括-S4	地輪	墨書有り
一括	一括-S5	地輪	墨書有り
一括	一括-S6	地輪	
一括	一括-S7	地輪	



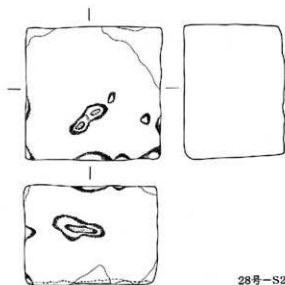
21号-S1



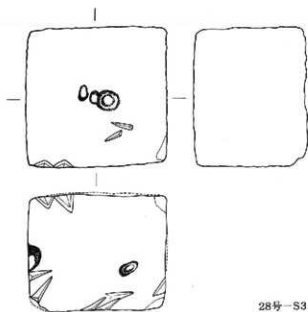
23号-S1



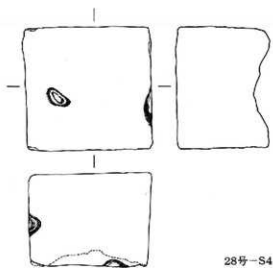
28号-S1



28号-S2



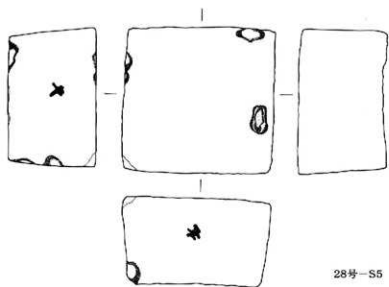
28号-S3



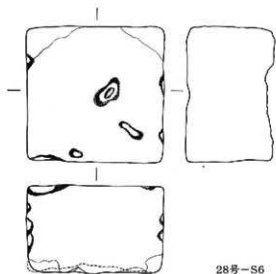
28号-S4



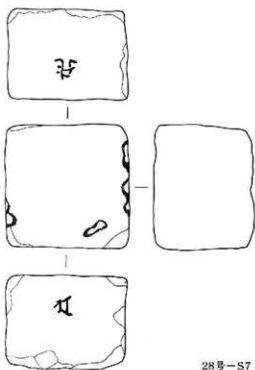
第 21 圖 五輪塔 1



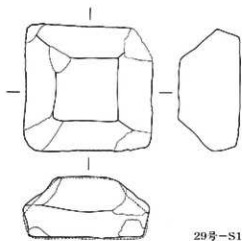
28号-S5



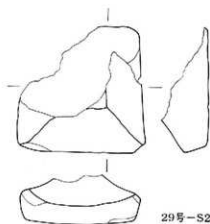
28号-S6



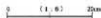
28号-S7



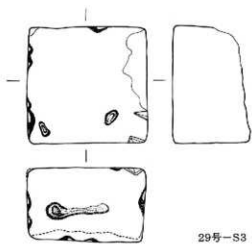
29号-S1



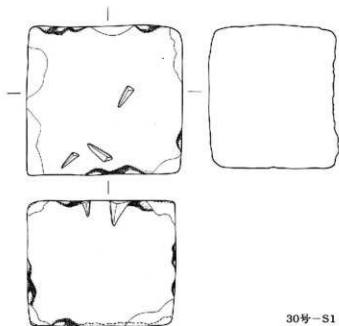
29号-S2



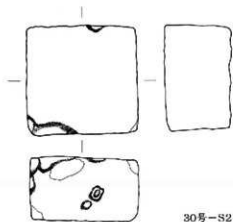
第22圖 五輪塔2



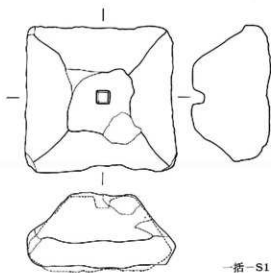
29号-S3



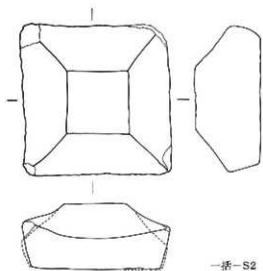
30号-S1



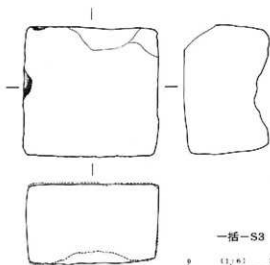
30号-S2



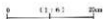
一括-S1



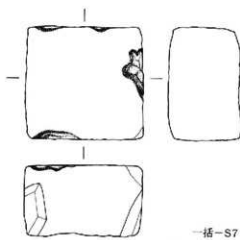
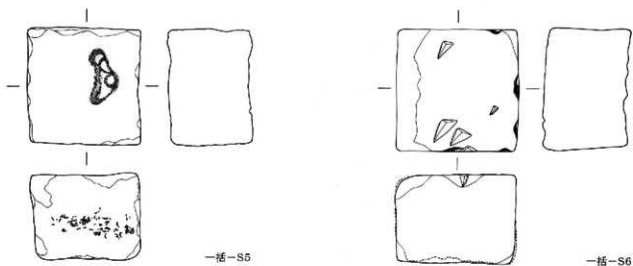
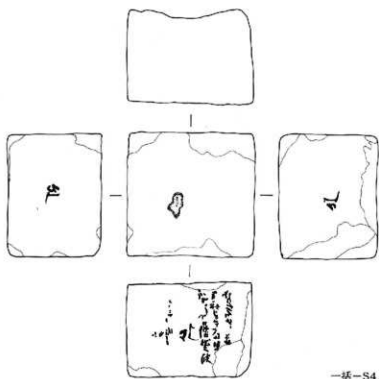
一括-S2



一括-S3



第23图 五輪塔3



第24圖 五輪塔4

第3章 自然科学分析

1 山宮地遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山梨県中巨摩郡敷島町に所在する山宮地遺跡では、発掘調査の結果、室町時代の墓坑が検出されている。この墓坑からは、副葬品として小皿が出土しており、小皿底部には赤色物質が付着する状況が認められた。本報告では、この赤色物質の材質を検証するため、X線回折分析を実施した。

1. 試料

試料は、小皿底部より採取された赤色物質が混在した土壌であった。分析に際して、この土壌中から赤色物質の抽出作業を行い、分析調査はこの抽出した赤色物質のみを対象とした。なお、抽出された赤色物質は、0.1gに満たない量であった。

2. 分析方法

赤色物質を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で粉砕した。この粉砕試料をアセトンでSi単結晶板に塗布し、X線回折測定試料を作成した。このX線回折測定試料について、以下の条件で測定を実施した(足立, 1980, 日本粘土学会, 1987)。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc.のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装置：理学電気製 MultiFlex Divergency Slit: 1°

Target: Cu(K α) Scattering Slit: 1°

Monochrometer: Graphite 湾曲 Receiving Slit: 0.3 mm

Voltage: 40 KV Scanning Speed: 0.5° /min

Current: 40 mA Scanning Mode: 連続法

Detector: SC Sampling Range: 0.01°

Calculation Mode: cps Scanning Range: 3~45°

3. 結果

赤色物質のX線回折図を図1に示す。なお、図1下段に示したパターンは赤色物質において検出された該当鉱物のパターンファイルである。

4. 考察

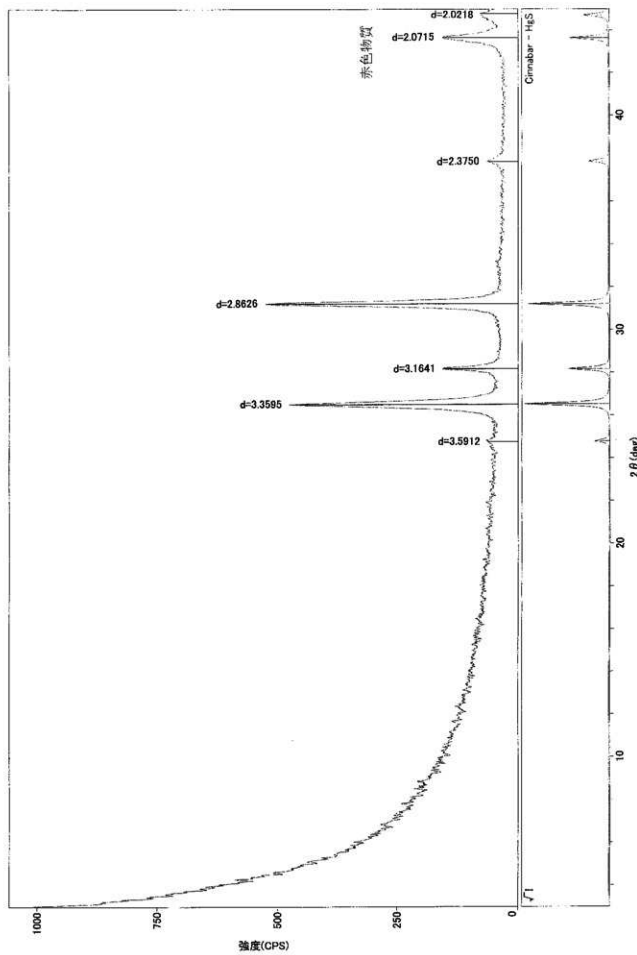
一般に遺跡などで検出される代表的な赤色物質にはベンガラ(赤鉄鉱; hematite[α -Fe $2O_3$])、水銀朱(辰砂; cinnabar[HgS])、鉛丹(鉛丹; minium[Pb $3O_4$])などがあり、これらの赤色物質はX線回折分析によって容易に識別が可能である。分析の結果、墓坑から出土した小皿底部に付着した赤色物質は、水銀朱のX線回折パターンに類似する。このことから、赤色物質は水銀朱と判断される。

引用文献

足立吟也(1980) 粉末X線回折法。「機器分析のてびき3」, p. 64-76, 化学同人。

日本粘土学会編(1987) 粘土ハンドブック 第二版, 1289p., 技報堂出版。

市毛 勲(1998) 新版 朱の考古学, 296p., 雄山閣。



第 25 図 赤色物質の X 線解析図

第4章 まとめ

山宮地遺跡第3次調査の結果、住居跡2軒、土壇墓32基、土坑1基が確認された。調査面積僅か70㎡とごく狭い範囲ながらまとまった資料を得ることができた。

住居跡2軒はいずれも平安時代末期のものと考えられる。特に2号住居跡は中世墓域の開発によって擾乱が著しく、残存状況は極めて悪い。山宮地遺跡南側周辺には奈良時代から平安時代にかけての集落遺跡と考えられる村統遺跡が存在する。本調査区の約70m南側には平成13年度に調査を実施した村統遺跡の調査地点があり、約300㎡の調査区で36軒の住居跡が調査されている。このようなことから今回発見された住居跡も村統遺跡で確認された集落の範囲に含まれるものと推察される。

土壇墓については、6号土壇出土カタバミ印端反皿、24号土壇出土菊印端反皿がいずれも瀬戸大塚第1段階のものであり、カワラケについては武田氏関連遺跡を指標とする土器群の中で収まり、また、114点出土した銅銭のうち明代の宣徳8年(1433)初鑄の宣徳通寶以後の銭貨が1点も出土していないこと、さらに遺構形状は南北を主軸とした隅丸方形、楕円形、長方形を呈し、五輪塔や集石を伴うものもあることなどから、造墓年代は15世紀末から16世紀中期後半と考えられる。

限られた調査範囲のため墓域全体の様相を窺うことはできない。ただ、土壇分布および出土遺物からは次のような特徴が見受けられた。

- I. 調査区東側から中央付近にかけては切り合い関係をもつ土壇は4号と13号の土壇のみであり、残り8基は重複しない。中央から西側にかけては切り合いをもつ土壇が比較的多い。
- II. 調査区東側に位置する土壇からは骨片、歯は検出されず、骨片、歯が確認された土壇は9、12号土壇より西に位置するものからであった。頭骨片の位置などから埋葬方法は北枕の土葬で、向きについては骨片の残存状況が悪く確認できなかった。
- III. 集石墓はその多くが20cm前後の石を土壇上面に敷き詰めた形をとり、掘り込みが深い。調査区中央の7号土壇より西側に分布する。また、1、2号土壇では土壇底面に5～30cm大の礫が確認された。石組みが施されたものはない。

造墓の年代は、15世紀末から16世紀中期後半というごく限られた時期であることが確認できた。また調査区西側を中心に切り合い関係が認められ、とくに、23号、28号、30号の各土壇墓の切り合いではそれぞれの造墓年代が、30号が15世紀末、28号が16世紀前半、23号が16世紀前半～中頃に置くことができた。以上のことから山宮地遺跡中世墓域の活用は70～80年間というごく短い期間であり、四半世紀毎の造墓による切り合いが見られることから、その墓域も限られた範囲であったことが推察される。

墓域成立の背景については、今後の研究課題であるが、幾つかの関係資料を見ることが出来る。

本調査区から東に50m地点において平成13年度に実施した山宮地遺跡2次調査では15世紀代の方形竪穴状遺構が4基、中世土壇墓の可能性のある土坑14基が調査され、竪穴状遺構1基から銅製水瓶の下半部分に16点の銅製品が入れ込まれた状態で出土している。銅製品の大半が錫杖頭や舍利塔台座といった密教に関連した法具であり、遺物に意図的に力や熱を加えた痕跡が看守されることなどから、何らかの儀礼行為に伴う埋納遺物である可能性が考えられている。

山宮地遺跡の中には御嶽道と呼ばれる古道が南北に縦断している。この道は『甲斐国志』に「山口九所あり、南口は吉沢村、塚原村、亀沢村」と記された金峰山へ続く御嶽九門の一つで、御嶽信仰の中心である甲斐金峰山への参道として古くから交通の要であった。また遺跡東方には臨濟宗御岳山慈徳院が所在する。開山は永和三年(1377)普明国師によるとされており、慶応四年に甲府寺社総轄職に提出された『社記・寺記』には境内に『御嶽田』、『御嶽塚』と呼ばれる御嶽権現が鎮座した名跡があるとしている。さらに『中巨摩郡志』には御嶽輪取二坊の一つとし記載があり慈徳院と御嶽信仰との深い関わりが見て取れる。慈徳院は密教寺院として御

嶽信仰に大きく関わっていたものと考えられ、その後改宗して現在の臨済宗へととなっている。

また、今回の調査地点から東約30mほどの今は敷島中学校グラウンドとなっている一角（敷島町島上条1.275番地。面積714.04m²）が明治31年まで空性院と呼ばれる寺院の所有地であったことが土地登記簿謄本によって確認された。空性院については『甲斐国志』に「天蓋山空性院小屋敷村恵林寺末」とある。また『中巨摩郡志』には「龍島山空性院 慈徳院末元和三年八月二十八日創立、開山保山和尚」と記されている。さらに空性院の過去帳が慈徳院に所在しており、そこには、「龍島山空性院開基積善院一透妙閑」とある。『社記・寺記』には記載がない。

建立年代が元和二年（1617）となれば、今回の山宮地遺跡第3次調査地点との関係は直接的にはないものと考えられる。しかし歴史の連続性や御嶽信仰、御嶽道、慈徳院などが関係した山宮地遺跡の全体像を解明していく上で、『空性院』が重要な資料となることは間違いない。

以上中世草城成立に関係すると考えられるいくつかの資料を紹介した。いずれも14世紀、15世紀代の御嶽信仰を介在とした宗教（密教）活動に関する資料である。山宮地遺跡は甲斐金峰山を中心とする御嶽信仰、これに付随する修験者の活動といった13、14世紀の宗教社会。さらに、その後の密教から禪宗へと改宗して新たな宗教社会のもとに活動を行っていった14、15、16世紀の宗教とそれを取り巻く人々との関係を示した遺産であり、宗教と政治など当該期の社会構造の一端を解明する上で重要な遺跡であることが判明をした。

引用・参考文献

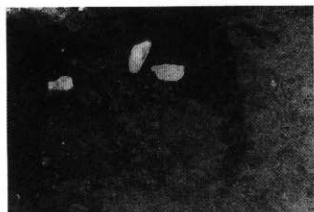
- | | | |
|------------------|------|--|
| 中巨摩郡聯合教育会 | 1928 | 『中巨摩郡志』 |
| 山梨県立図書館 | 1965 | 『甲斐国社記・寺記』第二巻 |
| 敷島町 | 1966 | 『敷島町誌』 |
| 雄山閣 | 1971 | 『甲斐国志』第三巻 |
| 鈴木昭英 編 | 1978 | 『富士・御嶽と中部霊山』名著出版 |
| 佐野 隆 他 | 2000 | 『深山山遺跡』 明野村教育委員会・峡北土地改良事務所 |
| 野代幸和 | 2000 | 「山梨県における中近世墓制の変遷」『山梨県考古学協会誌』第11号 |
| 甲府市教育委員会 | 2001 | 『秋山氏館跡』 |
| 降矢哲男 他 | 2001 | 「山梨県内における中世の土器様相について」『中世土器研究論集』中世土器研究会 |
| (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター | 2001 | 『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品』 |



1. 調査区と遠景



2. 調査区全景



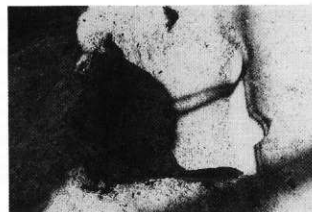
1. 1号土墳基



2. 2号土墳基



3. 3号土墳基



4. 4号土墳基



5. 5号土墳基



6. 6号土墳基



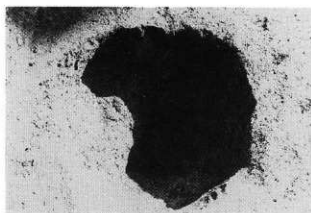
7. 7号土墳基



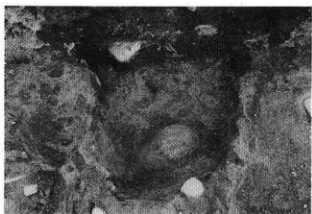
8. 8号土墳基



1. 9号土槨墓



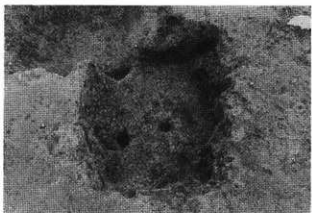
2. 10号土槨墓



3. 11号土槨墓



4. 12号土槨墓



5. 13号土槨墓



6. 14号土槨墓



7. 15号土槨墓



8. 16号土槨墓



1. 17号土坑墓



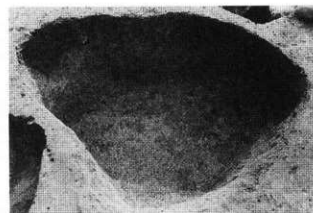
2. 18号土坑墓



3. 19号土坑墓



4. 20号土坑墓



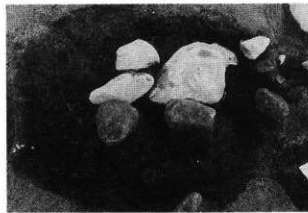
5. 21号土坑墓



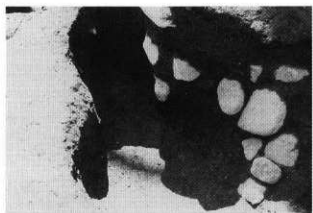
6. 22号土坑墓



7. 23号土坑墓



8. 24号土坑墓



1. 25号土坟墓



2. 26号土坟墓



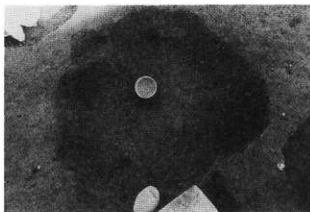
3. 27号土坟墓



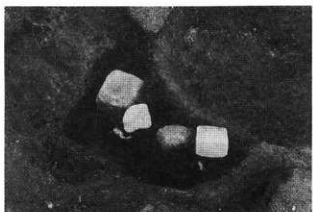
(28号土坟墓上面)



4. 29号土坟墓



5. 28号土坟墓



6. 30号土坟墓



7. 31·32号土坟墓



1. 1号住居跡



2. 2号住居跡



5. 4号土墳墓



6. 5号土墳墓



8. 7号土墳墓



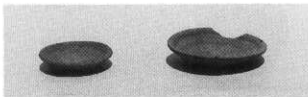
9. 8号土墳墓



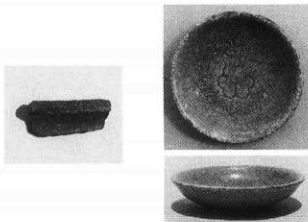
12. 11号土墳墓



3. 1号土墳墓



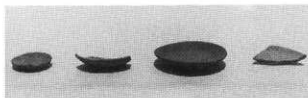
4. 3号土墳墓



7. 6号土墳墓



10. 9号土墳墓



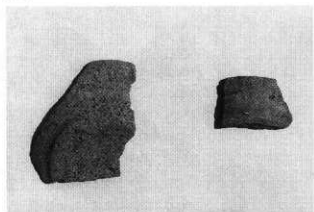
11. 12号土墳墓



13. 13号土墳墓



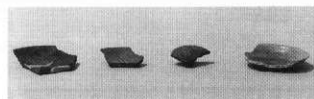
14. 17号土墳墓



1. 19号土壊基



4. 24号土壊基



5. 23号土壊基(1)



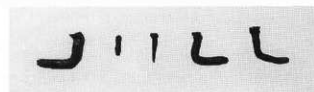
7. 25号土壊基



8. 27号土壊基



11. 30号土壊基



12. 土壊基内出土の釘



2. 20号土壊基



3. 22号土壊基



6. 23号土壊基(2)



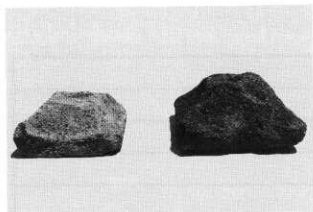
9. 28号土壊基



10. 29号土壊基



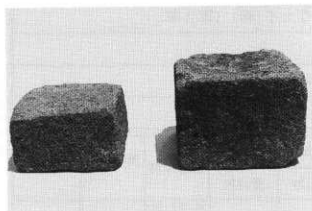
13. 遺構外出土遺物



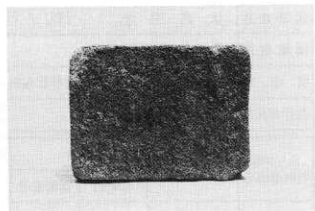
1. 五輪塔-火輪



2. 五輪塔-風輪



3. 五輪塔-地輪



4. 凡字



5. 凡字



6. ノミ跡

報告書抄録

ふりがな	さんぐうぢいせき							
書名	山宮地遺跡Ⅲ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書							
シリーズ番号	17							
編著者名	大 高 正 之 パリノ・サーヴェイ(株) (第3章)							
編集機関	敷島町教育委員会							
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020							
発行年月日	2003年(H15)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
さんぐうぢいせき 山宮地遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町島上条 1263	193928	37			平成13年 12月11日 ～平成14 年1月11 日	70	防火用 貯水槽 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
山宮地遺跡	土壌墓跡	室町時代	住居跡 土壌墓	土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器	中世の土壌墓32基、土壌内から土師質土器 2～3枚と古銭数枚が出土。ほか、五輪塔 の一部なども出土。			

敷島町文化財調査報告 第17集

山宮地遺跡Ⅲ

発行日 2003年(H15)3月31日

発行 敷島町教育委員会

印刷 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277-4111

佑協和印刷社

